



心の時代

パリオリンピックが開催されました。メディアを通じて日本選手の活躍が連日報道されました。活躍を報道することは大切な仕事であるかとは思いますが、日本人選手が金メダルをいくつ取ったという話が先行しているように思われました。ですから、選手も金メダルを期待されそのプレッシャーの中で競技し、負けると、思わず申し訳ないと言って涙を流す選手の姿も多く見られました。ここで「相手が上でしたが、楽しかった」という受け答えがあってもいいのではないかでしょうか。オリンピック競技は個々の技能を競うもので国と国が対抗するためのものではないのです。ナショナリズムの高揚のために過去にオリンピックは利用された経験があります。ですからなおのこと国家対国家の対抗をイメージするようなマスコミの言動を当たり前のように受け取るのもどうかと思います。個々の選手の交流がオリンピック精神である世界平和につながることが望ましいのです。個人が先で国が後からついてくる姿が望ましいのかもしれません。

その中で、スケートボード、ブレイキン競技の選手は少し違っていました。オリンピックに出ることと金メダル獲得が最終目標ではなかったのです。演技を終えた選手がお互いの演技を称え、称え合うシーン、それもどこの国かもわからぬ衣装を着ていましたね。「好きなことをやってきた。その延長にオリンピックがあった」というブレイキンの選手の言葉は新鮮でした。今回、オリンピック競技になりましたが、そもそもオリンピック競技ではありませんでした。そうです。このオリンピックで初めて競技になった種目です。ブレイキンは音楽に合わせて自由にダンスをして表現をします。何度も見ているうちに即興で違う音楽に合わせて体操選手のあん馬や床の動きを複合させたような技、片手で体を回したり音楽合わせてacroバットのような演技をしてみたり、動きを止めて見たり。これはAIにはできない、その場、その場での発想だと思いました。

では、団体戦はどうか。団体戦はそのチームワークが個人に代わって存在することが重要ですがブレイキンのようにニックネームでもいいのではないかでしょうか。もちろん国内予選がありますから各国の代表とはなりますが。あまりにも国代表というイメージが強すぎるのではないかと感じました。

金メダルが目標ですと、それを取ってしまうと、また次の金メダルが目標となり引退するまで国代表のプレッシャーの中で戦い続けなければなりません。それは楽しく思えるのでしょうか。昔、私たちが少年時代には根性もののスポーツ漫画のように、勝つために必死に練習することが美化された時代がありました。今は「スポーツを楽しむ」という言葉がよく聞かれるようになりました。オリンピックに参加した選手の中にも「楽しました」という言葉を話す選手のインタビューを訊くとホッとします。

勉強もそうです。志望校に入ることが目標だとすると、苦しいことに耐え抜くといったイメージが湧いてきます。「好きだから、楽しいから、もっと学びたい」となると学びが楽しくなります。そのためには「好きなこと」を見つけることが大切です。何でもいいと思うのです。すべての勉強がすべて好きだという生徒はまれです。高校時代は中学と違って学びが多いのは自分が好きなことのきっかけを見つけるためなのです。高校で学ぶ科目以外のことにあるかもしれません。スポーツ選手はやはりその種目が面白そうからはじまり好きになっていったのではないでしょうか。やらされるスポーツ、勉強では長くは続きません。それは自分で楽しく思えないからです。「やらされることより、自分でやりたいからやる」になるからこそ続くのです。

この夏、休みが長い期間に自分の好きなこと、面白そうなことを見つけにいろいろなところに出かけるのもいいのかもしれませんね。「自分探し」の旅は「自分の好きなこと」「楽しそうなこと」を見つける旅かもしれません。その原点はやはり『考えること』です。

令和6年9月